

## 特別優秀賞

### 心の弓

佐賀県 致遠館中学校 二年 横田心海

「あの、駅のホームまで、ご案内しましょうか。」

去年の秋、私は柱に背をあずけていた男性に声をかけた。男性は目に障害があるらしく、白と赤のしましまの杖を持っていた。その姿がいつも駅にあること、そして私と同じ方面の電車にあることを私は知っていたが、恥ずかしさからか、声をかけることができないでいた。

手をつないで電車まで誘導しているとき、心臓がうるさかったことをよく覚えている。

(黙っているのもおかしいな。何話そう。)

と、なかばパニック状態だったが、その人はとても気さくだったため、話はとても弾んだ。

そうして私と男性は、毎日顔を合わせるようになった。冬が近づいているためか、学校と駅を自転車で往復している私の手は、感覚がなくなるほど冷えていたが、彼は文句ひとつもなく、温かい手で私の誘導についてきてくれた。誘導中や電車を待っている間は、よく学校や家族の話をした。

「今日、考査の結果が返ってきたんです。」

「私の弟、馬鹿すぎて笑えるんです。昨日の夜……。」

彼とすごす時間は、いつもあつというまだった。だからいつも、電車を降りる彼の背中に向かって「明日も会えますように」と願いごとをしていた。

春が近づいた三月。冬季の下校時刻が夏季時間になり、私の乗る電車が二本ほど遅くなったため、彼とはあまり会えなくなっていた。部活が終わるとすぐに駅へ向かっていたが、いつもの場所に彼はいない。そんな日がずっと続いていた。しかし、少しして私の友達が、彼から手紙を預かったといて届けに来てくれた。手紙を開くと、そこには点字で感謝の言葉がつづられていた。そして私は、最後の文に目をとめた。

『夜の道 空と心に 銀の弓』

私は思い出した。彼と知り合ってからすぐに名前を聞きあったのだが、私は自分の名前を、

「心<sup>みなみ</sup>海です。心に海って書いて心海。」

と説明した。そうぞうしい車内だったので、海を「弓」と聞きまちがえることもあるだろう。しかし、まちがえられたことに悪い気はしない。

心の弓。私は彼の心の弓になれたのだろうか。

小さな親切が、私に彼との時間を与えてくれた。また冬になると彼と会える。そのときはまたこの手を差し出そう。そして半年分の話をしよう。そう決心して、私は電車から降りた。